

葵の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

19

明治大学博物館 外山 徹

十万枚護摩代参—重倫帰国後の動向

紀伊徳川家八代藩主重倫と高尾山との交流については、明和八年(一七七二)三月から二年半に及ぶ参勤交代にもなう江戸滞在が親密な関係を築いたと言える。

本来、重倫は明和九年の三月に和歌山へ帰国すべきところ、病気を理由に延期を続けてきた。その間には三男雅之助の出生などもあり、一年半後の安永二年(一七七三)九月、ようやく帰国の途につくことになる。重倫が高尾山に帰依するようになった理由は、明和八年九月付の葉王院隠居湛玄に宛てた書状からもわかる通り、自身の病気があつたが、紀州へ帰国して程なく、その快気が伝えられるに至つた。

重倫帰国後の祈禱継続

重倫が江戸を去り、さらに積年の病も治つたとすると、葉王院との関係もトーンダウンするかに思われるが、三男雅之助の生育祈願、また、愛妾お八百の懐妊・出産によつて、祈禱依頼関係は途切れてしまふことなく、その後も継続することになった。

江戸藩邸において葉王院との交渉の窓口となり、幾度となく書状を交換してきた浅井庄左衛門もまた、主君に同道して和歌山へ戻つたが、その後も相変わらず浅井が葉王院とのやり取りを受け持っていた。そうした中、写真をはじめとする十万枚護摩供への代参に関わる

書状は、珍しく浅井以外の名義によるものである。高尾山・江戸藩邸・和歌山という、多少距離のあるトライアングルの中での意思疎通の様子を取り上げてみよう。

まず、史料集に採録されているのは、十万枚護摩供の執行にあつた代参者派遣にかかわる安永三年二月五日付の浅井の書状である。冒頭「先だつてお取り遣いに及びそうろう通り」とあるので、すでにそれ以前から代参についてはやりとりが始まつていたことになる。

この十万枚護摩供執行にあたり、「右(護摩供)の節、紀伊殿より代参遣わさるべき哉、(承知成られ、下されそうろう間)」という記載は、誰が承知しているのか主語が定かではないが、続いて葉王院から代参者の名を問ひ合わせてきたという記事は紀州家側の派遣承認が前提の問答なので、「成られ、下され」というやや大仰な敬語表現の主語は重倫とい

うことになる。代参者名の問いに対して浅井は、「その表拙者同席の内右代参遣わされそうろうはずに付」と返答している。「その表」とは江戸のこと、江戸藩邸で同等の立場の者から代参者が選出されるということになる。

一方、史料集には江戸藩邸詰めであつた岡部小左衛門名義の二月一六日付の書状が掲載されている。そこでは、浅井に対し葉王院から(紀州家が)代参を立てるかという問ひ合わせがあつた、(代参派遣が)決まれば代参を承知するが、まだ決定ではないと記されたため紀州でしたためられた二五日付の浅井の書状より

一筆致啓達候然者十万枚護摩御執行来月三月四日右御起首被成候二付右之節同席之内 従 紀伊殿代参被立候若山右申来候右者幾日可致登山哉御申越候様致度候依之申越候恐惶謹言

駒木根八兵衛

二月廿四日 正親(花押) 葉王院様

この現代語訳は。

一筆啓達いたします。さて十万枚護摩のご執行は来たる三月四日から起首になるので、その際には同席の内から紀伊殿の代参を立てるはずと和歌山から連絡がありました。これは何日に登山すればよいでしょうか、お申し越しになるよう、いたしたく申し上げます。



十万枚護摩供への代参者派遣の日取りを問う書面

供は現在も最高の荒行として知られている。先の岡部の書状によると三月四日までに六日間、「昼夜執行」と書かれていて、その間、絶えることなく護摩修行が行われ、追伸には「右代参は御執行の内、一度あい立たれそうら

十万枚護摩供の執行 この、安永三年の十万枚護摩供の執行に調しては高尾山の麓上栲田村の旧家の日記にも「高尾山に十万枚ごま有り」と記事が見える。十万枚護摩

はば宜しき」とあるので、交代で代参者が詰めた前々年の紀州家が施主となつた八千枚護摩十座とは違い、ここでは、葉王院が主宰する行事への代参派遣となる。

十万枚護摩供というビッグイベントに関する記事が葉王院文書に確認できるのは、残念ながらこの紀州家家臣代参の日記には度々の執行の記事が見られる。享保五年(一七二〇)から残る日記における十万枚護摩供の最初の記事は宝暦七年(一七五七)二月二八日条に、「この日より高尾山に十万枚護摩始まり」とある。続いて宝暦九年(一〇年、一二年と一、二年間隔で執行された後、安永三年は少し時間が空いて二年ぶりの記載といふことになる。過去の執行も安永時と同様に一週間ばかりの間、護摩を焚き続けたであろうから、当然、葉王院門末を挙げての行事として執行されたであろうし、こうした行事の度々の執行は葉王院の寺勢興隆を示していると言えるだろう。

一八世紀後期の躍進 その祭事の活発な執行

からも、一八世紀の後半は、高尾山が信仰の地として大きく知名度を上げた時期と考えられる。その最初の動向として寛延三年(一七五〇)の縁起作は象徴的な出来事である。三年後の宝暦三年には飯繩権現社の拝殿・幣殿の再建が成つており、ほぼ今日の威容が整つたと推測される。その二年後には居開帳が執行され、紀州家から葵紋付の戸帳・水引が寄進されている。居開帳に合わせて三月には清滝も開創されており、葉王院の側から参詣者を誘致しようという積極策と見ることができ、七年の十万枚護摩に続いて、八年には現在も大本堂の後方、石の階段の脇に立つ宝篋印塔が奉納されている。これらの祭事の結果、先の旧家の日記に「おびただしき高尾参り」と記されるような状況が現出するに至つた。

さて、高尾山信仰伸張のパロメーターとして度々

言及してきた「永代日護摩名家記」の新規模檀家も宝暦七・八年にピークを形成し、東方の江戸との中間あたりの多摩郡村々に多く檀家が發生している。紀州家の帰依を受けた秀憲・秀興の時代は、寺格の上昇とともに高尾山が人々にポピュラーな信仰の地へと成長するために、次々と策の打ち出された時期だったのである。寛延の縁起を作成した第一六世山主秀憲はいろいろな意味で歴代住持の中でも傑出した人物であるが、宝暦三年に隠居をしてい。それは一線を退くというよりもむしろ、一七世秀興とのコンビで、葉王院の寺勢興隆に向けて様々な施策を打ち出す体制であつたとも言えうだ。山主においても特筆すべき躍進の時代の背景には紀州家の帰依があつたのである。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。